

高橋和巳論

真継伸彦



高橋和巳論

真繼伸彦

文和書房

高橋和巳論

昭和五五年六月二五日 初版発行
昭和五五年二月二〇日 二版発行

定 価 一三〇〇円

著 者 真 継 伸 彦

発行者 川 上 和 秀

発行所 株式会社 文和書房

東京都文京区小石川三十一、三
電話 東京八一三六五四一
振替 東京八一六六四九
整版 山口活版所
印刷 多田印刷株式会社
製本 大口製本印刷株式会社

目次

I

高橋和巳の倫理 5

全共闘運動と高橋和巳 31

高橋和巳とアジア 49

II

高橋和巳の文学 83

高橋和巳と現代文学 86

全体小説への意志——『悲の器』論 102

『邪宗門』の問いかけ 121

全体小説への冒険——『邪宗門』評 156

現代的主題に真向から取組む——『わが心は石にあらず』評 159

絶望的な心境を告白——『わが解体』評 162

III

高橋和巳の思い出 167

高橋和巳君のこと 184

『人間として』のころ 188

高橋和巳断章 192

展 墓 192

高橋和巳をしのぶ会 196

高橋和巳の十回忌に——あとがきに代えて 198

I

高橋和巳の倫理

五月三日の朝、危篤の報せを聞いて車で駆けつけたとき、右の鼻孔に酸素吸入の管を挿入された高橋和巳の、不精髭を生やした病み呆けた顔は、かなりの間隔を置いて大きな荒い呼吸をくりかえしていた。大きくひらいた口が荒い音をたてながら、ひきつけを起すように息を吸いこむと瞬時に吐きだしてしまふその呼吸の間隔は、心臓の衰弱とともにしだいにながびいて静止にいたる。見ながら、私は十九年前の夏に、結核性腹膜炎で死んだ妹の姿を想っていた。当時二十歳だった私はリルケに傾倒していて、「見ること、最後まで見つくすこと」という、『マルテの手記』その他にくりかえし書かれてある彼の当為が私の当為でもあった。私は発病後わずか三日で死んだ二歳下の妹の死のさまを、最期のときは母と二人で暴れまわる五体を抱きしめながら見とどけた。それは見甲斐のあることだった。ああ、ああと、呼吸が声帯を自然にふるわせて上げる無機的な悲鳴の間隔がしだいにながびき、五体が手足の先から紫に変色しはじめ、ゆるやかに心臓へせまってゆく最期のとき、精一杯大きくひらいて息を吸いこもうとする口を、烈しい痙攣が両横から押しふさごうとする。色白のふっくらした

十八歳の娘の顔が、口を突きだし歯をむきだして、呪われて呪う魔の形相を浮かべるのであるが、しかしそのとき、明りのついた部屋を映してうつろにひらいた茶色の両眼が、機械人形の眼のように小さく右にまわり左にまわりしていた。肉体のこのおそるべき悶絶を、体験している者がもはやいないことのそれが証であって、苦痛の絶頂である末期に何らかの救いがあるとすれば、自意識の消滅以外にないことがわかった。

薄茶色の毛布に隠されている高橋和巳の両腕が骨と皮ばかりに痩せて、生気のうせたその肌に一筋の静脈の蒼が異様に鮮明に透きでていることは、四月二十四日に大江、小田、柴田らの諸氏と見舞ったときに見ていた。三人は口々にはげましたけれども、私は何も言えなかった。かえって高橋のほうで小声で、北海道新聞に私が書いた『わが解体』の書評の礼を言ってくれた。モルヒネによって鈍化させられていた彼の意識はその午後、めずらしく鮮明だったという。食欲もあって、ひさしぶりに小さな握飯を二つ食べたと後日母堂から聞いたが、そのせいでもあっただろう、最後まで癌であることを知らなかった彼は、病気はもう峠を越したと思うと言っていた。しかし結腸から転移した癌のために五倍ほどにもふくれあがり、岩のように硬化した肝臓によって腸が押しつぶされ、排泄ももうできなくなったことを私たちは聞いていた。

私は十九年前に妹の死を凝視したあと、その死を一意的に意味づけることから自分の仕事を自覚的にはじめた。その後、解釈はさまざまに動揺したのであるが、今はすくなくとも、靈魂の不滅を肯定するいっさいの説を承認しない。肉体とは非連続的に連続する人類の生命という、大いなる必然のなかの偶然の所産であると思われる。私はそこに存在しているのだが、精神分析学者ユングはこの「私」

を二つに分ける。私が外界と關係する意識の中心であるエゴ（自我）と、その背後にたたえられてあるところの、父母より遺傳的に受けついで、さらに經驗を記憶し、意識の反応や志向の仕方を規制する無意識の中心であるセルフ（自己）と。仏教の唯識論とも一面で相応するこのとらえ方が、私には最も真理らしい仮説であると思われる。色心不二、すなわち肉体と精神とは本来同一の「もの」であるという仏教説にも私は同意したい。とすれば、生は一度きりであって、死とは私の消滅、完全な無化であってそれ以外のことを意味しない。私たちは無から生れて無に消えてゆくのではない。父母から生れて無に消えてゆくのである。

それゆえに垂死のときの苦痛が無価値であるなら、すなわちそのときに神仏の自己開示も信仰のなぐさめもなく、また精神の一種独特の緊張による新しい認識もないとすれば、私たちに望ましいのは安樂死、おだやかな眠りに似た死である。高橋和巳は神仏の自己開示など承認していなかったし、

「貧困には、普通に言われる経済的な意味のほかに、關係性の貧困というものもあって、病氣は人間が総体として克服せねばならぬもう一つの貧困の具体的な形なのである。（中略）貧しき者は、その内面において決して豊かではないというのが、特殊な例外を除く、一般的真実である。そして、私も残念ながら、その一般的法則の下にあった。病魔との闘いにエネルギーがほとんど消費され、脳の動きも、生命を支える中枢である脳幹の作用を残して、大脳皮質、その理性的機能はもちろん、感情や想像力も目にみえておとろえてゆくのが、自分にも解ったものだ」（『三度目の敗北——闘病の記——』『わが解体』）

と唯物論的に書く彼は、大手術を受けた者がだれでもそうであるように、肉体の衰弱は精神の衰弱

をもたらずばかりであって、垂死のときにはあるいは心弱い幻影をみるかもしれないが、新しい正しい認識などありえないことを知悉していただろう。そのうえ、彼は並すぐれた自意識と博識の持主である。知るべきことは知りつくしている。一月三十日に河出書房の坂本一亀氏から、高橋の病が癌であつて余命いくばくもないと報されたとき、私はただ安楽死を望んだ。そして五月三日、モルヒネによつて鎮静せしめられた彼が、肉体のおそるべき苦痛を知らぬげに眠っているさまを見て、せめてものこととなぐさめられた。末期の悶絶を二度と見る要もない。私は彼の苦しい呼吸のさまを見たあと、すぐに病室をでて、おなじ六階のロビーで、しだいに集ってくる彼の知友といっしょに死の時を待つことにした。長命すれば偉大な仕事を成就したにちがいない彼の、わずか三十九歳の死はきわめていたましい挫折であるが、私は彼の癌を報されてから三カ月あまり、そのいたまじさを噛みしめつづけてきた。

高橋和巳が『捨子物語』に書いている不気味な情景が脳裡によみがえる。第一章の冒頭で、ルペンと呼ばれる老人が夏の夕に怪談を語るのだが、それは線路に投身自殺した男にまつわる、実話らしい話である。

「警官は眼深にかぶった帽子からするどい視線を人垣に放ち、おもむろに手帳をとり出して瀕死人の方へ歩み寄った。警官はただ独りで、筵をつまみあげ、顔を近づけて男の顔を覗きこんだ。それからだった。その警官はよく聴きとれぬうわ言を口走った。

（私にはしかし、それがよく聴きとれました、と老人は言った）

『苦しいか。生きたいか、死にたいか？』

しばらく沈黙があった。

『もうものをいう力もないのか。年齢はいくらだ、職業は？　おい、なんとか言え』これは見物人にも聞きとれた。

『今、どんな気持なんだ。教えてくれ。お願いだ。今お前の頭に浮んでいるのはいったい何だ。一言でいい、なんとか言え——命令だ。答えろ』

警官は、すでに異物と化した男の頭を蹴とばした。

『おいこら。返辞をしろ、返辞を。どうしたら飛びこむことができるんだ。それを決心することや言ってるんじゃないぞ。どうしたら、そんな聖人みたいな気持になれるんだ。飛びこむときに、肉体が抵抗しなかったか。なにか秘密があるんだろう、秘密な方法が。お前はどうせ死んでゆけるんだ。教えろ。教えたって、お前が損をするわけじゃないはずだ』(傍点真継、以下同様)

私は高橋和巳の挫折の内容、すなわち彼が実現を志して未完におわった事柄を、能うかぎり具体的に明らかにしたい。そのためにまず彼の文学の、出発点における情況を明かにしたいのだが、するとよみがえるのは、右のようにまことに暗鬱で陰惨な心象風景である。またその風景と不即不離の、傍点の箇所に見られるような、常軌を逸した認識への酷薄な意志である。のちに知られるように、この酷薄な意志は他人よりも多く自分自身に向けられる。おなじ『捨子物語』の「神話」と題する序章のなかには、主人公の出生にあたったの、

「祈禱師の予言はこうであった。

『生れる子は本当は女に生れなければならない。しかし、不幸にも形だけは男に生れるだろう。子供のうちは、別段なんの変ったこともないかも知れない。しかし、そのまま育てれば子供はきっと不幸になる。なぜ不幸になるかは想像できません。異性を愛する力もなく、同性の友情に答える方法も知らないだろうから。ひたすら愛されんことを望み、なんのとり柄もなく、子は屈辱にまみれ、無為の淵に沈み、我と我が身を犯す無益な夢のはてに、息絶えるであろう』

という呪いにみちた、著者自身の運命をある程度予言していると思われる文章がある。随筆「教師失格」のなかには、実際に著者が生れたとき、母堂の信頼していた女占い師が、この児は本来女に生れるべきであったと、奇怪な予言をしたという話を書いてある。赤ん坊の高橋和巳は男に生れてしまったための不運をまぬがれるため、儀式的に近くの四辻にしばらく捨てられ、近所の人に拾ってもらって、家の門をくぐりなおしたというのである。右の一節はこの実話の変形であるが、そのことを知った上で、この文章を書いている著者の心境を想ってほしい。だれもが彼の自己呪詛の劇しさに思いあたるだろう。暗鬱な雰囲気の中での自己の否定性の剔抉が、高橋文学の出发点である。

高橋和巳は秋山駿氏との対談「私の文学を語る」のなかで、自分が中学四年頃から旧制高校時代にかけて、原因はわからないが一種の強迫神経症を患い、四六時中自殺することばかり考えていたと告白している。そのときにももの考え方の、外に向うよりは内にのめり込んでいく傾向性とか、観念的に過激な志向と度し難い厭世的気分の結合という性向の原型ができてしまったというのだが、また、彼は暗中摸索のその時期に、

「何か確実なもの、根本的なもの、核になるみたいなのを一所懸命求めていたと思うのです。そ

れから、どういう加減か、自己否定性みたいなものを比較的早い時期に身につけてしまったように思うのです。自分を否定したくて否定したくてしようがないのですね」

という注目すべき告白をしている。

敗戦という物心両面の廃墟の時代に思春期を迎えた者が、生のぞっとするような暗さにふれ、運命と闘うべき当為をみうしなうて神経症におちいり、自殺の誘惑に駆られるのはめずらしいことではない。今日では老齡層らしいが、当時自殺者数の首位を占めたのはつねに二十前後の青年だった。いや、今日でも思春期には、だれもが肉体の急激な変化と自我の独立（すなわち孤独）の自覚によって一種の恐慌におちいるだろう。この時期に開示される不安の強度と質、およびそこからの自己救済の仕方が当人の生を決定するともいえるのだが、高橋和巳の場合は、自分が依存するべき絶対への、宗教的ないし哲学的な希求が並すぐれて強かったと同時に、自分の否定性を強く自覚していたことが、彼の作品群をかえりみれば、思春期のまことに特徴的な反応であった。彼の作品はすべて自己否定の衝動の所産であるとも言える。なぜこんなにも自己を呪わなければならぬのか。先天的な性格なのか、それとも戦争ないし敗戦の惨澹たる体験が、彼を救いがたく孤独な、暗鬱な性格にしてしまったのだろうか。もはや彼に訊くことはできない。しかしともかく、

『悲の器』において、理性の権化みたいな正木典膳の特徴的な属性として、嗅覚が鋭いという事実を思い起すべきです。最も神に近いものと、最も野獣に近いものとの同時的共存存在。しかも、この正木典膳は、作者ははっきりと書かないけれど、物の形とその動きに対しては割合敏感なのですが、物の色そのものに対しては鈍感であって、弱色盲に近いのです。そこから、モノクロームで肅条たる

うそ寒い風景のなかの心象世界に、なおも見えない何ものかを求めて鼻をひくつかせている獣の暗澹が、くつきりと浮びでてくる。地獄です」という宗左近氏のすぐれた指摘（『悲の器』新潮文庫版解説）は、単に正木典膳の世界ではなく、著者高橋和巳がすでに中・高校時代に形成し、しかも小説を書くことによってしだいに強調していった自身の内的世界の情景である。右の色調と嗅覚は、彼の全作品にみなぎっているのだから。

五月三日の深夜、遺体につきそって鎌倉の彼の家をはじめて訪ねたときに、私はようやく彼の暗い孤独に思いあたったのだった。右手は大塔宮の首塚のある岡、左手にも小さな尾根が崖をつくっていて、そのあいだのごくせまい、冷えびえとした谷の入口いっばいに小さな平家が建っていた。隣家の建つ場所がないその家はまさに孤立荘と名づけるべきだろうが、夫人の話によれば、高橋は数年前に京都から東京へきて新居を探しもとめたさい、最初は都内で何軒か紹介されたがいずれも気に入らず、鎌倉で周旋屋に案内されてこの家を見たときに、たちどころに購入を決めたということだった。つまり、孤独なその家のたたずまいが、彼の気質にぴったり合っていたのである。思いあたったとき、『悲の器』『憂鬱なる党派』『邪宗門』『墮落』『日本の悪霊』『黄昏の橋』『白く塗れた墓』、あるいは『孤立無援の思想』『孤立の憂愁の中で』『わが解体』といった、数冊をのぞいていずれも暗鬱な彼の著作の題名が、その気質から湧きでているにちがいないことをあらためて思い知らされた。私はときに、このような題名の大仰さに辟易することがあったのだが、ついでながら高橋が私たちに予告していた、書かれずにおわった長篇の題名は「遙かなる美の国」というのである。

私が高橋と親しくなったのは三十九年ごろからだ。七年ほどの交友の経過をかえりみると、年

がかさなるにつれ、つまり彼が自分の暗さを作品化することによってしだいに強調し、またとくに全共闘運動の渦中にはいることによって心労と苦悩が深まるにつれて、人柄にも孤独の度合が深まっていったように思われる。夫人の話によれば、彼は晩年には私など『人間として』の同人をいちばん身近に思っていたらしい。昨年五月の手術のあとは、大学もやめたことだし生活のスタイルを変えて、できるだけ暢気に、また陽気に暮らそうとしていたらしいが、それでも仲間のうちでは、彼がいちばん口数がすくなかった。私は彼を友人というより戦友だと思っていた。彼が心中を腹藏なくうち明けようとしたことは一度だけあった。祇園でいっしょに飲んでいたとき、彼はホステスの肩に手をかけ、私をみつめたままふいに泣きだして、自分にはどうしても子供ができないのだと洩らしたのである。彼は酒を飲んでも口数がすくなかったから、これは思いがけない急変だった。酔いすぎたせいか、発作的に孤独の身がまえを破りたくなったらしかった。しかし一度きりのことであって、私には彼が孤独で寡黙なために、周囲の者に氣をつかわせる、関西弁でいえば「しんどい」人であるという印象が去らなかつた。

古くからの友人のなかには、べつな印象をもつ人がむろんいるだろう。しかしすでに高校時代の彼が、徹底した禁欲のはての自殺を究極の倫理とするジャイナ教に、本能的に惹かれたのは自己否定の願望のなせるわざだろう。また彼が野間宏氏や椎名麟三氏、とくに埴谷雄高氏の文学に早くから惹かれたのも、思想内容というよりそれらの作品の暗鬱な雰囲気、彼が無意識的に共感したからにちがいない。ところでこのようにみずからを呪う者が、「何か確実な、根本的なもの、核になるみたいなもの」、すなわち絶対者に求めるのは、罪と罰の明確な観念にほかならなかつた。彼は晴れやかな自

己への変革の原動力としてではなく、自分の否定性の根拠としての神を求めた。キリスト教徒のように、自分の否定性を原罪にたいする罰として、明確に意味づけたかったのである。彼が学生時代にマルクス主義に接近した動機のひとつも、やはり自分の否定性を、資本主義社会における人間の自己疎外として、明確に意味づけたかったからにちがいない。彼は師の埴谷雄高氏と同様、くどいほどの論理的思考癖の持主だ。ところが神はいない。明晰な合理主義者である彼に、非合理的な神の存在が容認できるはずはない。とすれば、理由のない人間の受難はただ不条理である。

「なぜ罰せられたか？ 罰せられたからだ。これが現代の地獄の原理なのです」

原爆の被災者の記録の出版を志す『憂鬱なる党派』の主人公西村恆一は、被爆者の受難の意味を「聖ルイス・レイの橋」を書いたS・ワイルダーのように考えぬいた結果、このように不条理な結論に達する。「彼岸には地獄も極楽もおそらくはありません。なぜなら、極楽はともかく、地獄はこの現実にあるからです。そしてその地獄は、等活地獄や、黒縄地獄こくじょうじごくといった責苦の地獄ではなくて、罪と罰の応報の絆が切れてしまっているという抽象的な地獄なんです。どんな高級・深遠な道徳も本当は罪と罰との応報の上にしか成り立ちません。そして、いまはその応報の絆がないんです。わかりますか？ 人を殺しても、人をなぶりものにしても、その者は罰せられないですむ。なぜなら、その者は良心をもち感覚をもち、亡霊におびやかされもする個人ではなくて、一つの〈法人〉、国家や軍隊だからです。階級や制度だからです。わかりますか？」とも西村はのちに語るのであるが、『捨子物語』から『日本の悪霊』にいたるまで、高橋文学の原動力は、罪と罰の因果関係が消えうせた現代において、その回復を希求するという悲劇的な意志である。この西村は大学卒業後二年間は地方の女学